

競馬がますます  
楽しくなる

続 ファンにやさしい

# 馬学講座

第60回 最終回

## 競走馬をめぐる状況の変化

案内人

辻谷秋人  
Akiho Tsujiga



これからも着実な  
進歩は続いていくはず

連載開始から丸5年60回という、たいへんに区切りのいい今回をもって、最終回ということになりました。

この「続ファンにやさしい馬学講座」シリーズが始まったのは5年前ですが、私が『優駿』で最初に馬学の連載を持たせてもらったのは1994年なので、そこから数えると実に20年以上が経過しています。途中、空白期間はあるのですが、それにしても長い間やってきたものだと思います。

これだけの時間が経つと、競走馬をめぐる状況もずいぶん変わります。サラブレッドの親子判定に使える遺伝子上の「場所」(「マーカー」と呼びます)をJRA競走馬総合研究所が世界で最初に発見したという話題を取り上げたのも、この間のことです。

もっと多くのマーカーを見つけられれば、DNAによる親子判定がそう遠くない将来に実用化できるだろうなどと、いま考えるととても呑気な話をしています。



2008年のジャパンCダートで復活を遂げ、その後一線級で活躍したカネヒキリ。同馬以上の成果を耳にする日が今から待ち遠しい

た。しかし実際にはご存じのとおり、そう遠くない将来どころか、とうの昔にDNA鑑定は世界的な標準になっています。また屈腱炎治療で幹細胞移植が実用化

されるなど、怪我や病気の治療分野でも長足の進歩が見られています。幹細胞移植などと聞くと、私たち素人には屈腱炎のすべてを解決する究極の治療法のようにも思えるのですが、残念ながらそれほど単純なものではないようで、まだ幹細胞移植は屈腱炎治療の決定版にはなっていません。それでも、幹細胞移植を受けたカネヒキリが復帰後にGI(J<sub>h</sub>I)を3

勝したケースを筆頭に、医療は着実に進歩を遂げているのです。そして屈腱炎に限らず、以前なら競走生命が絶たれるような疾病に罹った馬が、競争に復帰する例も増えてきています。

そういった最先端の話題がある一方で、競馬ファンが知りたいのは、案外、昔から変わらないことだったりもします。

おそらく競馬を始めた人のほとんどが「骨や腱のような脚の故障が、なぜ競走馬では命にかかわるのか」という疑問を、一度は感じたことがあるでしょう。

もちろん命にかかわるのはとても重篤な症状のものなのですが、いくら重篤であつたとしても、馬を安楽死させなければならぬほどのものとは、人間が脚を骨折したときのことを考えると、とても思えません。

やはり人間としては「治るまで普通にしていればいいのではないか」と、どうしても考えてしまいます。足を地面に着けられないような状態はとても不便ではあるけれど、そのうち治るんだからいいのではないか、と思います。ではなぜ馬は……、という疑問が湧いてくるのは当然のことでしょう。

ファンの疑問に答える  
方法を模索し続ける

そうしたファンの感じる疑問に答えてくれる読み物、いや、ファンの疑問に答えるとかいうと偉そうなので言い直しますが、読んだあとに「へえ、馬ってそうなんだ」と思えるような記事は、やはり必要だと思えます。この連載もそうした意図を持って始まり、60回も続けることができましたが、さらにファンの皆さんの期待に応えられる内容を模索するためこの連載に一度区切りをつけさせていただきました。

この5年間、JRA馬事部、同競走馬総合研究所、競走馬理化学研究所、日本装蹄協会の、ジャパン・スタッドブック・インターナショナルの皆さん、それから前回までの松山康久元調教師と、ひじょうに多くの方々のご協力をいただきました。そして何より、この地味な記事を読んでいた読者の皆さんに、お礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。